

批評

前之園和喜 著
『性暴力をめぐる語りは何をもたらすのか—被害者非難と加害者の他者化—』

勁草書房、2022年、279頁

加藤 このみ*

本書は、日本語メディアにおける性暴力の語られ方に関する豊富な事例を用いて、その言説にあらわれるジェンダー規範を明らかにした上で、性暴力に関する「わたしたち」の意識を問う社会学的研究の成果である。性暴力が身近に起きている状況の中でさえ、一定数の人びとは性暴力を自分ごととして認識していない。著者は、性暴力の被害者・加害者がどのように非難／他者化されているのかを明らかにするために、被害者と加害者の語られ方に加えて、性暴力からは距離をとる「わたしたち」の語られ方にも光をあてる。さらに批判的男性性研究を専門とする著者は、新聞や雑誌における性暴力事件の報道の言説を通して、マジョリティが共有するジェンダー規範と非対称なジェンダー秩序を指摘する。なお、本書が分析対象とするのは男性の加害者によって女性の被害者に対して行われた性暴力である。以下では本書の概要を明らかにした上で、研究史上の意義と批評を述べる。

本書は、序章と終章に挟まれた第一章から第四章で構成される。序章では、先行研究の性暴力をめぐる語りの論じ方において被害者と加害者が同等に扱われていないことが指摘され、その限界を乗り越えるための分析方法が示される。先行研究における性暴力をめぐる語りは、「異常な他者」としての加害者と非難すべき点が認められない「理想的な被害者」を対置する語り（タイプⅣ）と、「正常なわたしたち」としての加害者と「非難されるべき女性」を対置する語り（タイプⅡ）に二分されてきた。そしてタイプⅣこそが誰もが正当性を認める「真の被害者／加害者像」であると想像されてきた。ここで著者は、横軸を加害者の他者化、縦軸を被害者への非難とした二元図式を提示し、「他者化される加害者—非難される被害者」の語り（タイプⅠ）と「他者化されない加害者—非難されない被害者」の語り（タイプⅢ）の存在を示唆する。

第一章では、見知らぬ加害者による少女・成人女性への性暴力事件を、語りをめぐる二元図式に配置しながら分析している。ここでは加害者を他者化し、被害者を非難しないタイプⅣの語りのみが確認された。ここで分析される事件は、パート（1991）の定義する〈真の性暴力〉の条件すべてに限りなく一致するため、それが性暴力のマスター・ナラティブ（桜井 2002）とされ、被害者を非難するタイプが確認されなかったと結論づけられる。

第二章では、複数の加害者による大学生や成人女性への性暴力事件を分析し、タイプⅠからⅣまでのすべての語りタイプを確認している。ここではすべての事件が〈真の性暴力〉と認識されなかったこと、そしてタイプⅠやⅡにおいては、危険性を理解せず進んでイベントに参加したことなどの被害者の「落ち度」を読み込んだことで、被害者を非難する語りタイプがあらわれたことを明らかにしている。

第三章では、第一章・第二章での分析結果について、ラベリング理論とジェンダーの視点から分析している。第一節では、〈性行為への主体性の発揮〉概念という本書独自の概念が導入される。〈性行為への主体性の発揮〉は「性行為を望む、性行為と結びつけられた言動を行うなどの積極的な行為に実際におよぶこと」と定義され、本人の意思や意図とは関係なく、第三者がその存在を読み込んだり認めたりするかどうかによって焦点をあてた概念として用いられる。被害者女性は〈性行為への主体性の発揮〉を行うことで非難されるが、加害者男性においては〈性行為への主体性の発揮〉の欠如が他者化に動員されることが指摘されている。第二節ではラベリング理論に依拠しながら、

* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2023年入学 共生領域

ラベリングする側である「わたしたち」の語られ方を分析している。女性の「わたしたち」は、被害者が女性の規範に違反したと見なし、それと区別される形で立ちあげられる。一方で男性の「わたしたち」は性暴力加害者を「異常な者」としてラベリングすることで、それとは区別される「正常な性行為」を望む存在として提示される。

第四章では、〈性行為への主体性の発揮〉の存在／不在に関する評価が被害者女性と加害者男性とで異なっていることを、「性の二重基準」の議論に接続して論じている。〈性行為への主体性の発揮〉に関しては、女性に対してはその存在が否定的に評価されたり被害者非難に動員されたりする一方で、男性に対してはその不在が否定的に評価されたり他者化に動員されたりする。そこにあらわれている「性の二重基準」の規範が男女間の非対象なジェンダー秩序を維持・再生産していると説明されている。

終章では、男性の「わたしたち」が〈性行為への主体性の発揮〉を達成したり追求したりすることが、女性支配の達成および志向であるという意味で、男性優位の社会のジェンダー秩序を維持・再生産していることが指摘され、加えて本書のマジョリティ研究との接続可能性が確認される。

以上で述べた通り、本書は、性暴力をめぐる言説に関する多様な従来研究の成果を明確に整理した上で、とりわけ以下の二点において重要な貢献をしている。まず、これまで別々に議論されてきた加害者男性と被害者女性の両方を組み込んだ分析を可能にした点である。二元図式を用いて性暴力をめぐる報道の言説をタイプ別に分類したり、これまで被害者女性に言及する際に多く使われてきた「落ち度」という用語に代わり、加害者男性と被害者女性の両方に使用できる中立的な概念として〈性行為への主体性の発揮〉概念を導入したりすることで、加害者と被害者の語られ方を組み合わせた分析視点を提示すると同時に、その語られ方の揺らぎをも分析に取り込むことに成功している。さらに本書の独自性は、被害者と加害者の語られ方だけでなく、それを取り巻く「わたしたち」、すなわちマジョリティ側にも研究の視点を広げたことにある。〈性行為への主体性の発揮〉という本書独自の概念は、行為者自身ではなく、第三者が行為者の主体性をどのように認識し評価するかという点に基づいている。これにより、事件とは一見無関係とされる「わたしたち」を問うことが可能になる。この分析は、「社会のなかに暴力を肯定する意識や態度があり、それを凝縮するようにして加害男性の人格と行動が表出されている」という中村（2019）の議論をさらに前に進めるものである。

しかし他方で、第四章以降の「性の二重基準」と男性加害者の他者化を結合させた分析は、本書の議論の流れをいささか捉えづらくさせている。著者は第三章までの議論において、加害者の他者化に動員される様々な要素を提示しているが、第四章においては、「性の二重基準（リース 1960）」を〈性行為への主体性の発揮〉概念と接合させることで、従属的男性性（コンネル 1987）を持つ加害者男性を否定的に評価したり他者化したりする規範に絞った議論を展開している。ここで「性の二重基準」を取り上げて加害者の他者化の議論を一本化しようとすることで、第三章までの精微な言説分析の議論は後景に退けられている。また、本書ではメディアの中でも新聞と雑誌を分析対象としているが、新聞と雑誌メディアの性格を十分に考慮せずにその言説を並列して分析することには慎重になるべきだと評者は考える。著者は、新聞は「テレビに次いで信頼度が高い」とする一方で、週刊誌などの雑誌記事を扱うことで「直接的・煽情的な表現の分析」（p.30）が可能になるとしている。しかしながら、メディアは「逸脱」を社会的に創出する機能を有す（平林 1989）中で、とりわけ週刊誌においては「逸脱者」を定義し創出する機能が強いのではないだろうか。著者は受け手が言説を受動的に受容するだけの存在ではないことを認めつつ、人々が新聞や週刊誌の記事をどのように受け取っているのかは十分に検討していない。新聞と雑誌の性格を比較する際には、報道中の「わたしたち」の分析に加えて、その報道を受け取る「わたしたち」に焦点を当てた分析も効果的となるだろう。さらに性暴力の報道におけるジェンダーの作用を分析するには、取材者や記者のジェンダーも考慮する必要がある。終章で著者自身も指摘しているように、本書で取り上げられた言説の生産者の多くを男性が占めていると考えられる。男性の記者が男性加害者について語るときに動員される男性性や、女性の被害者について語る時に作用するジェンダー規範についての検討があれば、さらに著者の議論に厚みが出ただろう。

しかしこれらの評者の意見は、著者の提示した数々の知見の意義を損なうものではない。以上に概観した通り、本書は日本においては未だ数の少ない、メディアにおける性暴力の言説の緻密な分析を行っている。さらに被害者非難と加害者の他者化、そしてそれを語る「わたしたち」を提示し、その語りにおけるジェンダー規範の作用を明らかにしたことで、広く性の領域における暴力や差別に関する従来研究に新たな知見を提供した。著者は、「男性」

加藤 前之園和喜 著『性暴力をめぐる語りは何をもたらすのか—被害者非難と加害者の他者化—』

を公言する人びとが性暴力と自分たちを完全に切り離していることへの疑問を起点として、性暴力についての研究を行ってきたと述べている。性暴力を肯定し容認してきた社会と、男性のジェンダー研究者である自分自身への徹底的なまでに厳しい眼差しを有する著者の気概を研究者として見習いたい。

参考文献

中村正, 2019, 「暴力の遍在と偏在—その男の暴力なのか、それとも男たちの暴力性なのか」『現代思想』青土社, 47 (2): 64-76.

平林紀子, 1989, 「『逸脱』に関するニュースの社会過程」『新聞学評論』38: 124-137.

